脱肛および左内反足を伴った脊椎披裂の 1 例

日本医科大学産婦人科教室 (主任 三谷茂教授)

秋 丸 猛 虎 岸 野 貢 近 藤 登
Taketora, Akimaru. Mitugi, Kishino. Noboru, Kondō.

緒 言

脊椎披裂は脊柱の先天性発育障碍の 1 種であつて、Tulpius が 1641 年初めて Spina bifida と命名報告したものである。本邦において、三谷氏の宿題報告によれば、分娩総数 80435 例中、0.017%，奇形数 729 例中、1.92% といわれる。われわれは今回、2500 g の新生児に脱肛および左内反足を伴った。脊椎披裂の 1 例に遭遇したので報告する。

症 例

患者は、昭和 34 年 3 月 6 日、某助産院において、妊娠 9 カ月、第 1 胎向、後頭位にて娩出せられた女児であつた。某助産院にて娩出児が異常を呈しているので、直ちに当科に入院せしめた。

家族歴：両親の遺伝的素質および梅毒反応は陰性であつた。

入院時所見：体温 36.5°C—脈搏 90，体重 2500 g，身長 48 cm，頭囲 32 cm，前後径 10 cm，大斜径 12 cm，小斜径 8 cm，大横径 8 cm，小横径 7 cm，であつた。腰部に約手拳大の軟で、波動を呈し、表面は、中央部に壊死状を呈している囊腫状の腫瘤が認められた。左足部は定形的内反足の状態を呈し、自動運動はあまり活潑ではなかつた。しかし他動運動には障碍はなかつた。肛門は、強度の脱肛を示していた。また哺乳力はほとんど示さなかつた。

レントゲン撮影所見：腰仙部には明確な披裂像は認められなかつた。しかし囊腫状腫瘤の中央部と交通しているが如き部分は、上部仙骨部に認められた。

患者の処置および術前の経過：直ちに哺育器におさめ、哺乳力なきため、葡萄糖、ビタミン剤、等を投与し、暫く様子を見る事とした。腫瘤は漸次増大する傾向にあり、入院時、その大きさは 6.0×6.0 cm であつたのが、7 日目すなわち 3 月 13 日には 6.3×6.2 cm となつた。同日家族の希望により、一旦退院したが、3 月 23 日囊腫が自然に破れたため、再入院し、手術を行う事とした。

手術所見：3 月 24 日手術施行、まず皮膚に紡錘状の切開を加え囊腫を剔出した。脊髄液が流出するため

椎体の関係を明確にする事は出来なかつた。軟膜および硬膜は catgut にて、それぞれ連続縫合を行い、さらにその上に単縫合を施し、髄膜の開口部分をとじた。その上に絹糸で皮膚縫合を行い、手術は終了した。脱肛に対しては手術的操作を加えなかつた。

術後の経過：手術後、発熱はなく徐々に哺乳力は増して、術後 3 日目、1 日量 100~120 cc は哺乳する様になつた。輸液およびペニシリン注射を行い、体力の増強をはかつた。手術創に対しては、圧迫繃帯をするも、髄液の流出はまぬかれず、3 月 29 日抜糸するに手術創の中央部は離開していた。その部分は感染を防止する意味でアクロマイン軟膏を塗布し、さらに圧迫繃帯を行つた。脱肛は徐々に恢復する状態であつた。体重は手術直後急激に減少し、2300 g となるも、術後 7 日目より増加しはじめ、4 月 5 日すなわち術後 12 日目、2600 g となつた。哺乳力も漸次増加し、術後 10 日目には、600 cc 哺乳する様になつた。手術創は術後 13 日目には離開した部分は非常に少くなり、髄液の流出も軽度となつた。さらに術後経過を観察する予定でいたが、家の都合にて 4 月 5 日退院した。

患者の現在の状態：体重 6800 g，身長 66 cm，で 1 日量 750 cc の哺乳力を有している。手術創も肉芽組織により完全に閉塞している。脱肛は腹圧をかけない時はほとんど認められず、排便も 1 日 1 回正確にある。左内反足は、現在、マッサージ療法を行っている程度で軽快している。

考 案

脊椎披裂は、前に述べた如く、脊椎の先天性発育障碍の 1 種であつて、オランダ解剖学者 Tulpius が 1641 年、Spina bifida と命名報告した事にはじまる。本邦においても、益子氏、斎藤氏、松本氏、大草氏、藤原氏、芦沢氏、星氏、石原氏、土田氏等、数多くの報告がある。その発生頻度に関しては、三谷氏の宿題報告を見るに、奇形数 729 例に対して、1.92% を示している。また脊椎披裂は、前方脊椎裂と後方脊椎裂に分けられ、月本氏によれば、脊症披裂 120 例中、前方脊椎裂 1 例に対し、後方脊椎裂 119 例と報告してい

る。

つぎに本症の臨床症状であるが、披裂局所における変化の他に、三谷氏によれば、例数 14 の中、内反足 5、鎖肛 1、腹壁破裂、脳水腫等となっている。また神中氏は、下肢の知覚麻痺および栄養障碍、皮膚および腱反射異常、膀胱直腸障碍、腰痛、坐骨神経痛、足部変形等があげられ、就中足部変形に関しては、内反足、外反足、凹足、高度の扁平足、さらにまれに先天性股関節脱臼を挙げている。また Beck は本症の 60% に内反足および凹足を認めたと報告している。月本氏は、腰背痛患者の脊椎奇形 524 例中脊椎披裂が 120 例あつたと報告している。われわれの経験した如き高度の脱肛を伴つたものは、最近 15 年間の本邦文献中には報告されていない。

本症の一般に用いられている分類法としては、(1) 開放性脊椎披裂症 (Spina bifida aperta) (2) 嚢状脊椎披裂症 (Spina bifida cystica) (3) 潜在性脊椎披裂症 (Spinabifida occulta) の 3 種に分類されている。第 1 の開放性脊椎披裂は稀有で、普通脊椎披裂症と呼んでいるものは、第 2 の型である。つぎにその内容において、脊髓膜ヘルニア・脊髓嚢ヘルニア、脊髓嚢脊髄膜ヘルニア、および脊髄脊髄膜ヘルニアにわかつ。

脊髄披裂の成因は、胎生初期において行われる發育機転に関連して、その發育抑制によつて起る奇形であるが、その發育障碍の原因については今なお不明とされている。羊膜癒着、遺伝梅毒、等挙げられているが、一般に承認されるにいたらない。

脊椎披裂の發生部位について、星氏、土田氏の報告によれば、脊椎のいずれの部位にも發生しうるが、發生学上脊椎閉塞の最も遅れて完成する腰部背面に多い。したがつて骨欠損は椎弓の部分的欠損、棘突起の完全または不完全欠損または両者の合併せるものがあり、それが 1 つまたは数個の脊椎骨に亘つて認められる。神中氏によれば屍体 1.6%、健康人 X 線像 2.4% にみられるという。さらに星氏は、仙骨管完全開放は脊椎披裂中 1.4% に第 1 仙椎椎弓癒合不完全は 3.6% にみられ、その潜在脊椎披裂中極めてまれな、仙骨管完全開放を報告している。

本症の経過に関しては、土田氏によれば、多くは次第に増大し、脊髓管と交通大なる場合には速かに増大し、とくに麻痺症状を有するものは、衰弱によりて死亡する事がある。時としては、急激に披裂して急に脳脊髄液が流出して、直ちに死亡する事もある。脊髄膜ヘルニアは手術最も容易にして、脊髓嚢ヘルニアこれ

に次ぎ、脊髓嚢脊髄膜ヘルニアおよび脊髄脊髄膜ヘルニアの手術的予後は不良である。また、ウエルニッツ氏の統計によれば 90 例中大多数は生後 5 週内に死亡し、5 才まで生存したる者は 20 例に過ぎず、また、手術成績の統計によれば手術 39 例中、25 例死亡し、手術直接の結果としての死亡は 13 例にして、12 例は全治したと報告している。

われわれの経験した脊椎披裂は、分類 (2) の嚢状脊椎披裂症 (Spina bifida cystica) であり、内容は脊

第 1 図 腫 瘤 部 分

第 2 図 脱 肛 部 分

第 3 図 術後 5 日目手術創および脱肛部分

髄膜ヘルニヤであつた。合併症としては、高度の脱肛であるが、これは諸家の述べる如く陰部神経叢の欠損に因るものであつて本症の根本的治療法はない。また、左内反足を認めたが何等特別な治療法を施すことなくして自然に軽快して現在に至っている。

結 語

われわれは、脱肛および左内反足を伴つた脊髄被裂症に、手術的操作を加え、術後3カ月半経過せるも、現在なんら大きな障害を残さず成育している1例を経験したので報告した。

稿を終るに当り、御指導御校閲を賜つた恩師三谷教授に深謝致します。併せ種々御援助を与えられた岩倉学士に謝意を表します。

本論文の要旨は、第 37 回日本産科婦人科学会神奈川地方部会に於いて発表した。

参 考 文 献

- 1) 三谷茂：日産婦誌，**5**，(6)，(1953)
- 2) 神中正一：神中整形外科学，南山堂，1953
- 3) 星秀逸：整形外科，**4**，(1)，58 (1953)
- 4) 土田晃：北海道産婦会誌，**6**，(2)，114 (1955)
- 5) 益子千年長：熊本医会誌，**11**，(7)，853 (1935)
- 6) 斎藤静：日本医事新報，697，218 (1936)
- 7) 大草守一：産婦紀要，**19**，(11)，2387 (1936)
- 8) 藤原哲：産と婦，**6**，(1)，32 (1938)
- 9) 芦沢菊枝：北海道産婦会誌，**2**，(3)，82 (1941)
- 10) 石原和美：産と婦，**24**，(2)，181 (1957)
- 11) 月本裕国：日整会誌，**32**，(5)，501 (1958)
- 12) 松本修：日外会誌，**42**，(1)，1683 (1942)
- 13) Rectal prolapse in infant with hydrocephalus and spina bifida, E.L. Potter: Pathology of the Fetus and the Newborn, 311

Kanamycin に対する昭和 33 年度 流行赤痢菌株の感受性度の分布

日本医科大学衛生学教室

清 水 怜	大 杉 実
Satosi Simizu	Minoru Ōsugi
平 林 磐 夫	神 谷 利 和
Iwao Hirabayasi	Tosikazu Kamiya
高 倉 剛 二	寺 島 睿
Kōzi Takakura	Satosi Terasima

緒 言

赤痢菌の抗生物質に対する耐性化の問題¹⁾²⁾³⁾はすでに研究室の問題を出て、防疫上の新しい対象にまでなっている⁴⁾⁵⁾。

Streptomycin, Chloramphenicol, Tetracycline に対しての3者耐性株の出現⁶⁾は、赤痢の特効薬としてのこれ等抗生物質の地位を急激に変化されるかも知れない事態に至つた。

この時にあたり、Kanamycin の発見は、誠に重大で、その治療効果についてもすでに報告がある⁷⁾。そこで著者等は、現在の流行株について、Kanamycin の感受性度を測定し、今後再び Streptomycin, Chloramphenicol 或は Tetracycline の如き、耐性株の出現を防止すると共に、使用前の状況を知ろうと考えた。

実験及び成績

1. 対象流行菌株

昭和 33 年 9 月、全国の地方衛生研究所の御好意によつて送られた昭和 33 年夏季の流行赤痢菌株である。

2. 感受性度検定方法

厚生省、伝染病予防審議会、赤痢部会で決定した抗生物質感受性度試験の平板稀釈法に従つて Kanamycin と赤痢菌株とを作用させた。

3. 成 績

調査した耐性株の菌型別分布は第 1 表に示す総株数 982, Sh. flex. 2a が 318 株で最も多く次いで Sh. sonnei 244 株, Sh. flex 2b 216 株, Sh. flex. 3a 115 株の順で昭和 33 年度の全国流行分布を大体示し